

美術科教育学会通信 No.118 2025年3月3日

- 巻頭言 □第47回岡山大会案内（最終案内） □第47回岡山大会案内【研究発表一覧】 □理事通信 □書評
- 学会総会委任状の電子化と提出方法について □本部事務局より

巻頭言 Introduction

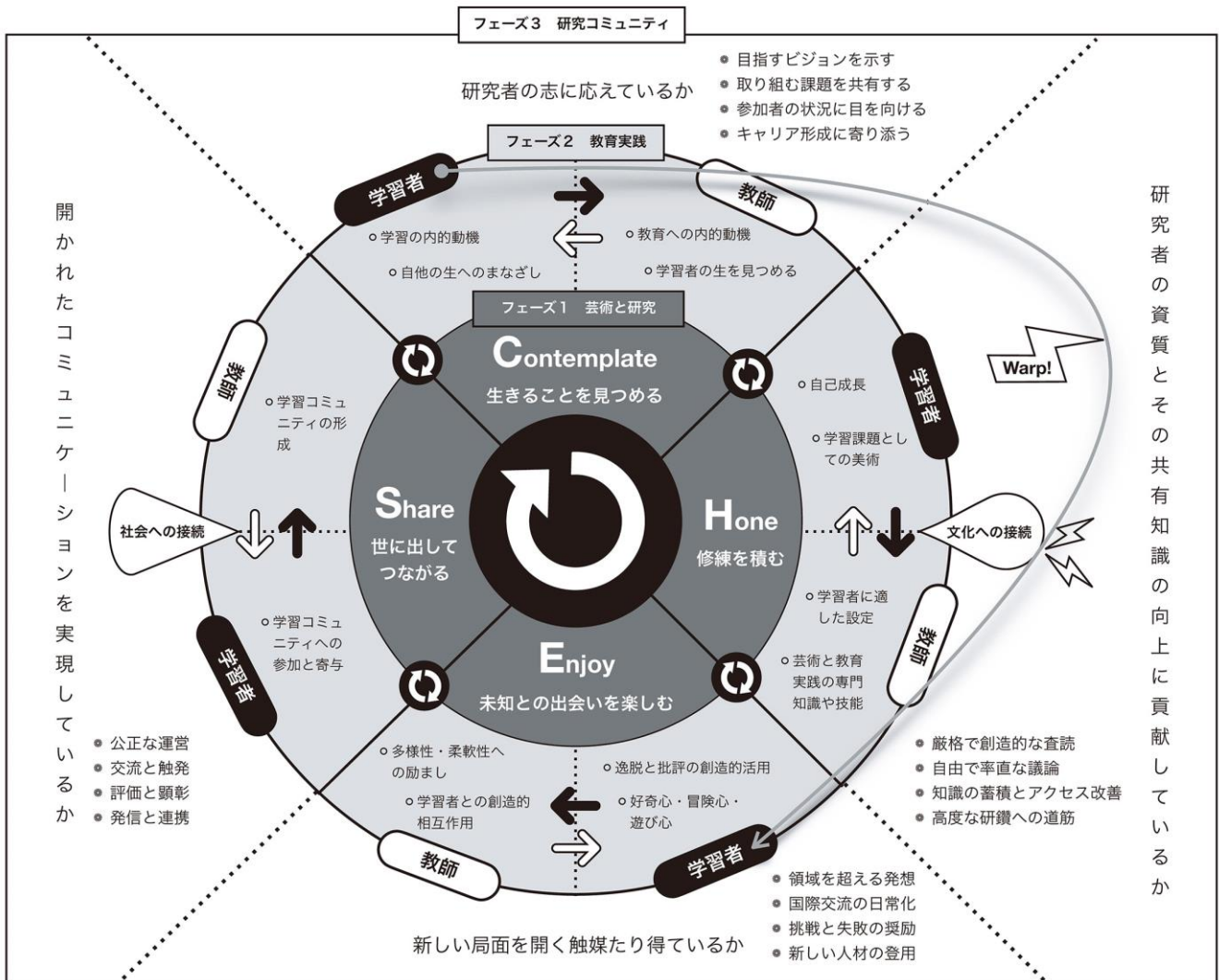
芸術のサイクルを回そう Spin the Cycle of Art

代表理事 直江俊雄（筑波大学）

Representative Director: Toshio NAOE, University of Tsukuba



© Kaori NAOE



芸術と研究コミュニティのCHESサイクル, CHES-ARC (CHES Cycle in Art and Research Community)

私は、この学会は芸術的サイクルを基調とした研究コミュニティを目指すべきだと思っています。ここでいうコミュニティとは、地域社会というよりも、共通の大きな目的をもって能動的に参加する研究者が、互いに学び合い、共通の知識を深めていくことのできる集団という意味です。では、「芸術的サイクル」とは何を意味するのでしょうか。

美術教育者がよく参照する『芸術による教育』（ハーバート・リード、1943）は、難解な仮説的論考の集合体ですが、私が唯一着目できる点は、宮脇理・本学会元代表理事が小野二郎の説を通して私たちに示唆したこと、すなわち、芸術による教育とは芸術創造の過程と教育の過程を一致させることであり、さらには芸術の過程があらゆる社会的過程の基層をなすことを目指すという主張です（宮脇理「本書への接近—解題にかえて」、リード、同書和訳2001所収）。

前ページの図は、その考えに触発されて、美術教育研究の共同体である本学会の動きを、芸術創造の過程と重ね合わせたらどうなるかを、私なりに考えてみたものです。

円の中心にある「フェーズ1」は、私が考える芸術における4つの過程（生きることを見つめる、修練を積む、未知との出会いを楽しむ、世に出してつながる）と、美術教育研究の過程を重ねて構想した、C(Contemplate livingness), H(Hone expertise and craftsmanship), E(Enjoy encountering the unknown), S(Share and connect with the community)を巡るCHESサイクルです。拙著「美術教育者と研究技法」（美術教育学叢書第3号『美術教育学 私の研究技法』2022所収）で提案しました。

その外側を巡る第二の円が表す「フェーズ2」は、フェーズ1のサイクルを教育実践の過程に拡張したものです。教師と学習者の相互作用のもとで進行していく教育の過程を、芸術的行為としてあらためて捉えようとしています。

「芸術的行為」とは、普通の人々の能力を超えた天才的偉業にのみ存在するものではありません。日々の教室で発生する子どもたちの創造活動の中に、そしてそれを見守り触発を続ける授業実践の中に、ごく普通に存在するものであり、その特質に気づき、より深めていこうとする行為の中に実現していくものだと考えます。図には「Warp!」やら「文化への接続（稲妻マーク）」などを書き入れましたが、詳しくは拙著「芸術的行為としての授業実践」（美術教育学叢書第4号『美術教育学 私の実践技法』2025所収）で説明しています。

さて、フェーズ2の外側に広がる四角形のエリアで示した「フェーズ3」では、本学会の核をなす芸術、教育研究、教育実践（フェーズ1と2）を包含する研究コミュニティとしての条件を、問いかげの文の形で示してみました。C「生きることを見つめる」エリアでは、

本学会を構成する会員、すなわち研究者の「志（こころざし）に応えているか」と問いかけます。研究者としての生き方やアイデンティティ、理想や目的などに関わる部分です。もちろん、一学術団体に一人の研究者の人生を支えることなどできるものではないのですが、創立の精神の共有や、個々の研究者の真剣な参加動機などに目を向けることは、運動の形骸化を防ぐ最も重要な要素の一つではないでしょうか。

そしてこのサイクルの4つの問いかげのそれぞれに、思いつきですが、4つの実践項目を並べてみました。すなわちCエリアでは、「目指すビジョンを示す」と「取り組む課題を共有する」が集団としての意思と実践を集結していく動きであり、「参加者の状況に目を向ける」と「キャリア形成に寄り添う」が、個々の研究者の参加目的や期待、状況などの掌握に努め、研究者としての人生の歩みに何らかの形で寄与することです。

以下、H「修練を積む」エリアでは「研究者の資質とその共有知識の向上に貢献しているか」、E「未知との出会いを楽しむ」エリアでは「新しい局面を開く触媒たり得ているか」、S「世に出してつながる」エリアでは「開かれたコミュニケーションを実現しているか」、という条件に、それぞれ4つの実践項目を掲げて、私たちの学会の研究コミュニティとしてのあり方を振り返るための問いかげとしてみました。

なお、ここで「研究者」とは研究論文を発表したかどうかにかかわらず、本学会の会員として活動している仲間をすべてそう呼んでいます。また、Cエリアの実践4項目だけ動詞で終わる文になっているなど不統一ですが、なにぶんまだ私の思いつき段階ですので、お許しください。

叢書第3号で提示したフェーズ1のサイクルでは、S「世に出してつながる」が研究成果を発表するための査読の過程を含んだエリアなのですが、フェーズ3のサイクルは発表を受け入れるコミュニティそのものの活動を表すので、H「修練を積む」の中に、世に出す研究の質を高めるための、厳格で、かつ研究者同士の触発によって創造的な役割を果たすような査読のあり方や、大会発表や研究部会などでの「自由で率直な議論」を実践項目として入れました。一方、フェーズ3におけるS「世に出してつながる」は、学会そのものの民主的で公正な運営を土台としながら、自主的で活発な交流が生まれ、優れた活動を称え合い、社会への発信や外部との連携を着実に進めるための実践項目を掲げています。

そして、芸術の過程を基調とする団体であるならば、E「未知との出会いを楽しむ」の中に示したように、創造的な機運に満ちた、いつ参加しても新しい触発が得られる、楽しい場でありたいですね。

岡山大会の開催が近づいてきました。未知との心躍る有意義な出会いを、共に参加してつくりましょう！

第 47 回岡山大会案内（最終案内）

Final Notice of the 47th Conference in Okayama



岡山後樂園から岡山城を望む

第 47 回美術科教育学会岡山大会

大会実行委員長 赤木里香子（岡山大学）

■会期：2025（令和7）年3月22日（土）・23日（日）（両日とも受付9：00～）

■会場：岡山大学 津島キャンパス（岡山市北区津島中3-1-1）教育学部 講義棟／創立五十周年記念館

■大会テーマ：Art の縁辺から学びを考える

今年の春はとりわけ遅く、岡山後樂園の梅林もまだロウバイの黄色と早咲きの白梅しか目につきません。それでも、あと20日もすればずっと温かくなり、多くの花々と共に皆様をお迎えできるはずと期待しております。

長らくお待たせして申し訳ございませんでした。岡山大会の最終案内をお届けいたします。

本大会では57件の口頭研究発表が予定されております。発表者の皆様、どうぞよろしくお願いたします。発表者を含めた事前申込も140名を超えました。ありがとうございます。定員100名の懇親会への申込も、まだ受け付けております。あと30名ほど参加できますので、どうぞお早めにお申し込みください。

詳しくは、岡山大会ホームページ <https://sites.google.com/view/okayama2025/jaaed/home> をご覧ください。講演・シンポジウム、実行委員会企画の講師紹介や概要をアップするなど、随時更新しております。大会スケジュールについては二次案内からの変更点もございますので、ご確認いただき、お気をつけてお越しください。

■大会参加費・懇親会費

	大会参加費		懇親会費（※定員100名）	
	事前申込	3/15以降の申込	事前申込	3/15以降の申込
支払い方法	Peatixで清算	Peatixで清算	Peatixで清算	Peatixで清算
正会員*	4,500円	5,000円	5,000円	6,000円
会員以外(一般)	5,500円	6,000円	5,000円	6,000円
学生会員***	2,500円	3,000円	5,000円	6,000円

*「大学美術教育学会」又は「日本美術教育学会」の会員は本学会会員と同様に、正会員の料金で参加できます。

***「学生会員」は、本学会に「学生会員」として登録済みの会員のことを指しています。なお「学生会員」に該当している方は、在職の有無は問わず、「学生会員」の料金でご参加いただけます。それ以外の学部生・大学院生、聴講生、研究生、科目等履修生は「正会員」「会員以外(一般)」のどちらか該当する方となります。

お得な事前申込期間は、**2025年3月14日（金）23時59分まで**です。まだ間に合います！

岡山大会 web サイトの「参加申込はこちらから」に入り、①大会申込・演題登録（大会参加申込…はこちら）、②懇親会・お弁当の青いボタンをクリックして Peatix を開き、各種の申込と参加費等の支払いを行なってください。クレジットカード払、コンビニ払、ATM 払に対応可能です。領収書は Peatix の領収データをご利用ください。

2025年3月21日（金）までに参加申込をされた方には、名札を準備いたします。大会当日となる3月22日（土）、23日（日）に受付で参加申込をされる場合は、手書きの名札となります。

なお、当日の受付でも現金の授受は行わず、Peatix で清算していただきますのでご了承ください。

■口頭研究発表者の皆様へ

(1) 発表資格

筆頭発表者・共同研究者は全員、大会参加費を納入し、筆頭発表者は学会年会費を納入していることが条件です。滞納している場合は督促いたしますので、速やかに振込をお願いします。

(2) 発表時間は、発表20分、質疑10分の計30分です。司会の進行に従い、時間を厳守してください。

(3) 使用機器・配布物

発表にパソコンやタブレット等を使用する場合は、各自で持参してください。プロジェクターへの接続は

HDMI が基本となります。必要に応じて、接続用の変換アダプターを各自で用意してください。配布物を持参される方は、会場入り口付近の机に置いてください。

(4) 発表者控室は、2階 5205 演習室(20 席)と 3階 5303 演習室(35 席)です。譲り合ってください。

■会場までのアクセス

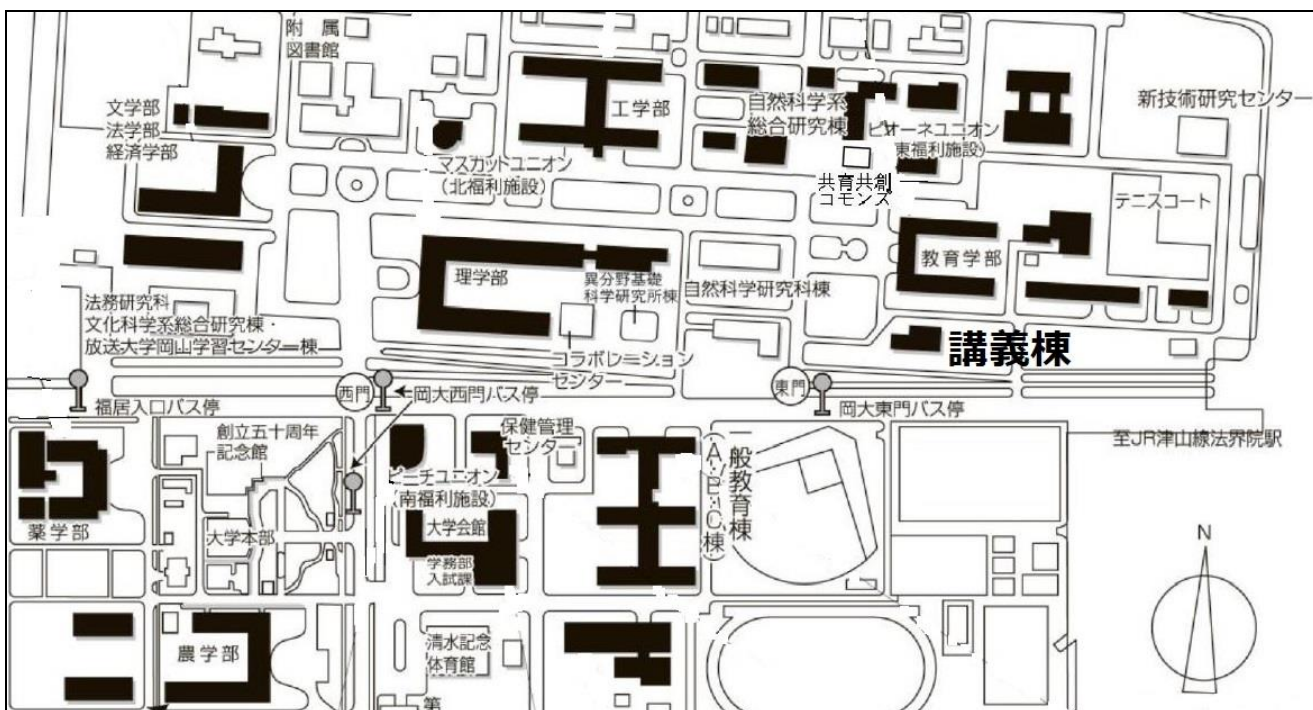
岡山大学 HP の「津島キャンパスアクセスマップ」または、岡山大学教育学部 HP の「津島キャンパスまでのアクセス」でご確認ください。教育学部講義棟は「東門」を入れて右手の建物です。タクシーご利用の際は、岡山大学津島キャンパスの「東門」の手前か、ゲートを入れて「教育学部」の玄関で降車してください。

★教育学部講義棟 最寄り駅 JR 津山線「法界院駅」岡山駅より 徒歩約 10 分（本数が非常に少ないです）

★教育学部講義棟 最寄りバス停

岡電バス【47】系統（岡山駅西口発「岡大西門経由 岡山理科大」行（約 10 分）の場合→「岡大西門」

岡電バス【17】【67】系統（岡山駅東口発「岡山大学・妙善寺」行（約 30 分）の場合→「岡大東門」



岡山大学津島キャンパス中心部～東側・教育学部周辺

■会場と Wi-Fi 環境について

1 日目午前と 2 日目の会場は主に「教育学部 講義棟」です。受付は講義棟の北西側の入口です。1 日目午後は「創立五十周年記念館」が会場となり、懇親会は五十周年記念館の向かい側の「岡山大学生協 南福利施設 ピーチユニオン 4 階 レストラン」で開催します。これら岡山大学キャンパス内では、弘前大会と同様に国際学術無線 LAN ローミング基盤 (eduroam) を使用できます。当日受付で ID とパスワードを発行予定です。ただし岡山大学のネットワークは不安定になりやすいため、安定した Wi-Fi 環境が必要な方はご自身で機器をご持参ください。

■宿泊について

宿泊施設の確保・斡旋は行っておりません。ご自身でご予約をお願いします。岡山市街地のホテルを取りにくい場合は、岡山県内の倉敷、総社、玉野、児島なども選択肢に入れてみてください。新幹線を使えば、岡山から広島県福山、兵庫県姫路までは 20 分前後と通勤圏内です。

■昼食・お弁当について

学会当日、教育学部から約 400m(徒歩 5 分程度)の岡山大学生協 北福利施設 マスカットユニオン 2 階の食堂が利用できますが、混み合うことが予想されます。また、学内のコンビニは土日休業となります。

お弁当の注文は、参加登録と同時に、また参加登録後も申し受けますので、Peatix からお申込みください。当日、会場にてお渡しします。なお、アレルギー対策等は行っておりませんことをご了承ください。

■その他

公益社団法人おかやま観光コンベンション協会の補助金獲得のため、宿泊情報提供の呼びかけを行ってまいりましたが、大会参加者の皆様の「居住地」(都道府県名)情報の収集に切り替えました。ご面倒をおかけいたしますが、改めてご協力をよろしくお願い申し上げます。

岡山大会 お問い合わせ用メールアドレス：美術科教育学会第 47 回岡山大会 okayama2025_jaaed@gmail.com

第 47 回岡山大会最終案内（研究発表者及び発表演題一覧）

Final Notice of the 47th Conference in Okayama: List of Presenters and Presentation Titles

第 47 回美術科教育学会岡山大会

大会実行委員長 赤木里香子（岡山大学）

【1日目】2025年3月22日(土)

午前 《研究発表 I》

※企業による出展：両日とも9：00～／教育学部講義棟3階 5307 演習室

教育学部 講義棟 9：00～受付

※13：40以降の受付は、創立五十周年記念館 1階ロビー

	A会場	B会場	C会場	D会場	E会場
	2階 5206	2階 5208	3階 5304	3階 5305	3階 5301
① 9：30 10：00		スペインの美術館・博物館における視覚障害者のアクセシビリティに関する調査研究 池田 吏志（広島大学）， 茂木 一司（跡見学園女子大学），大内 進（星美学園短期大学）	子どもの遊ぶ姿の観察に関する一考察 溝上 怜海，青木 萌華， 景山 愛梨，曹 文博（岡山大学大学院）	中学校美術科における伝統美術を活用した題材開発研究 —仏像のシルエットを参照することによる彫刻制作を中心に— 竹内 晋平（奈良教育大学）	美術科の長期的ルーブリック（素案）の開発 森田 亮（明星大学）
② 10：05 10：35		米国 DBAE 後期におけるカリキュラム変革に関する考察 南 洋平（和歌山県立粉河高等学校）	「ポスト・造形遊び時代の美術教育」はいかにして可能か？：再布置化の条件について 清家 颯（東京学芸大学）， 菊地 虹（立教大学大学院）	国宝鳥獣人物戯画を題材とした美術教育の可能性 —作品の実寸大教材の開発と教育実践を通じて— 秋本 瑠理子（東京藝術大学大学院美術研究科後期博士課程）	教材としての美術館・博物館展示の可能性 —大学におけるアカデミック・ライティングの授業実践— 大久保 範子（岡山大学）
③ 10：40 11：10	《国際部企画》 第2回 国際研究セミナー 講演(オンライン) 美術教育の新しい形を探究する アニタ・シナー (カナダ，ブリティッシュ・コロンビア大学教授)	C・P. ブッシュキューレらの「芸術教育」構想とM. ウアラスの教育実践 —ブッシュキューレ編著(2020)『ヨーゼフ・ボイスと芸術教育』を中心に 宇田 秀士（奈良教育大学）	小学校図画工作科高学年の造形遊びに関する「見方・考え方」の一考察 —題材名「ここから見ると」の実践から「もの派」との関連性を踏まえて— 西丸 純子（熊谷市立籠原小学校）	社会に開かれる「もてなしの設(しつらえ)」体験型鑑賞の可能性 —中学校2学年での授業実践を踏まえて— 小倉 千絵（茨城大学教育学部附属中学校）	よさを発揮し個性を認め尊重し合う子どもの育成 —対話型鑑賞（朝鑑賞）を通して— 青木 善治（滋賀大学）
④ 11：15 11：45		美術教育におけるパフォーマンス(なつて/みる)学習の検討 —教科書調査を通じて— 郡司 明子（群馬大学）	創造主義を支えるシステムの顕在化 —美術教育が求めた造形遊びの意味— 小林 貴史（東京造形大学）	高校生とアーティストの創造的思考を活性化させる「子どもの哲学」の事例研究 大平 修也（岡山大学）， 茂木和佳子（新潟県立六日町高等学校），松本健義(上越教育大学)	絵本『スイミー』の日本的受容 有田 洋子（島根大学）

<p>⑤ 11:50 12:20</p>	<p>《国際部企画》 第2回 国際研究セミナー ワークショップ(対面)</p>	<p>美術教育学研究における 内的倫理 金子 一夫 (茨城大学)</p>	<p>「造形遊び」の意義につ いて ～教育実践のあり方と考 え方～ 山下 暁子 (青山学院大 学)</p>	<p>不易と流行の視点で捉 える東牟婁美協版画教 育 —共同版画の再開発 西尾 正寛 (畿央大学), 福田 誠 (北山村立北山 小中学校), 清水 悠里 (那智勝浦町立勝浦小 学校)</p>	<p>塑像制作の構想過程に 粘土を取り入れること の有効性に関する研究 鎌田 純平 (弘前大学教 育学部附属中学校)</p>
<p>⑥ 12:25 12:55</p>	<p>美術館におけるデジタ ル化と教育法の探究 スサナ・バルガス＝メ ヒア (コロンビア、ボゴタ現 代美術館学芸員)</p>	<p>へボコンが問う図工美術 教育の課題～プログラミ ング学習を基盤にして～ 井上 昌樹 (育英短期大 学), 茂木 一司 (跡見学園 女子大学)</p>	<p>「造形遊び」の過程で子 どもが目指す形とその典 型に関する一考察(2) —体性感覚に注目した実 践事例を基に— 佐藤 絵里子 (弘前大学教 育学部), 坂本 卓也 (弘 前大学教育学部附属小学 校), 外崎 美佳 (弘前大 学教育学部附属小学校), 八嶋 孝幸 (弘前大学教育 学部附属小学校)</p>	<p>1956～2021 年度美術科 教科書における「抽象表 現」題材の解説文の検討 山口 喜雄 (元宇都宮大 学)</p>	<p>大学におけるアトラ イティング教育の指導 とその効果 吉田 奈穂子 (筑波大学)</p>

12:55-14:10 昼休憩		※弁当 (注文分のみ) 配達は11:00頃の予定
<p>13:05 13:55</p>	<p>教育学部 講義棟 A会場 2階 5206 論文投稿 ランチカフェ</p>	<p>※創立五十周年記念館への移動時間を含む</p>
<p>※13:40以降の受付は、創立五十周年記念館 1階ロビー</p>		

【1日目】2025年3月22日(土)

午後 《開会行事/総会》 《講演・シンポジウム》

<p>岡山大学 創立五十周年記念館 金光ホール</p>	
14:10-15:00	開会行事/総会
15:10-15:50	<p>中邑 賢龍 (東京大学先端科学技術研究センター シニアリサーチフェロー) 講演「学校と反対の学び場を作ってみたら」</p>
15:55-16:35	<p>神原 秀夫 (プロダクトデザイナー /アートディレクター 東京大学先端科学技術研究センター 特任助教) 講演「美術の時間」</p>
16:40-17:40	<p>シンポジウム テーマ「自分が生きることを感じる力, 自らオモシロイを生み出す力」 登壇者: 中邑 賢龍, 神原 秀夫, 清田 哲男 (岡山大学教授)</p>

《懇親会》

<p>岡山大学生協 ピーチユニオン(南福利施設) 4階 レストラン</p>	
18:00-20:00	懇親会 (17:30 受付開始)
18:00-18:15	<p>美術教育学賞 授賞式 ※終了後、岡山駅西口行き 貸切バス運行予定</p>

【2日目】2025年3月23日(日)

午前 《研究発表Ⅱ》

教育学部 講義棟 / 9:00~受付					
	A会場	B会場	C会場	D会場	E会場
	2階 5206	2階 5208	3階 5304	3階 5305	3階 5301
① 9:30 10:00	現代美術の学びを通じたSTEAM型の実践についての一考察:「アート表現」科目での授業実践から 前沢知子(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)	制作活動における振り返りの再構築:メタ認知的コントロールを用いた自己調整学習と未来志向の知識蓄積の促進 金子 美里(関西福祉大学)	倉橋惣三の児童芸術論と「製作」についての一考察 神谷 睦代(新潟県立大学)	作品構造を活用したコミュニケーション形成を目的としたワークショップと新しい鑑賞教育のかたち 一岐阜県現代陶芸美術館と茨城県陶芸美術館での連携企画を事例に 齋藤 敏寿(筑波大学)	
② 10:05 10:35	STEAM教育の実践から考察するA(美術)の役割 一ベトナムにおけるワークショップの事例から 新井 馨(西九州大学)	図画工作における記録が子供の創造性に与える影響 一子供の日記における記述と授業体験との関連に着目して 服部 真也(国立大学法人奈良女子大学附属小学校), 浅野卓司(桜花学園大学), 大塚有佳(新潟大学附属長岡小学校)	幼児期の「遊び」と児童期の「教科学習」との関係についての研究 一子どもの2年間にわたる縦断的調査からの考察 山中 慶子(長崎女子短期大学)	大学と地域をつなぐ木育 一大学生と共に自然とふれあう親子の造形活動 三上 慧(東洋英和女学院大学)	美術館と連携する探究的な学びの一考察 一「アート試食会 高校生が料理する探究美術展」の事例から 茂木 和佳子(新潟県立六日町高等学校), 笠原未帆(上越教育大学学校教育学部), 松本 健義(上越教育大学)
③ 10:40 11:10	ARTを主軸としたSTEAMの実践Ⅲ ~Society5.0時代の生命形態学~ 渡邊 晃一(福島大学)	医学における「ビジュアルアート教育」の展開 一医学教育に必要な“気づき”を与える授業 森 弥生(岡山大学), 木股 敬裕(岡山大学病院), 大塚 益美(株式会社大塚デザイン), 福富 幸(岡山県立美術館), 久保 卓也(岡山大学病院), 小比賀 美香子(岡山大学病院), 加藤 基(岡山大学), 松本洋(岡山大学病院)	造形遊びによる幼児の空間把握に関する実践的考察 一東雲幼稚園のプロジェクト保育と比較して 蝦名 敦子(柴田学園大学短期学部)	「そぞろみ部」の活動を踏まえたフィールドワーク型鑑賞学習の可能性に関する研究 市川 寛也(群馬大学), 赤石 賢也(群馬大学大学院)	美術館と連携した鑑賞活動支援教材の開発と実践 ~『アートとともだち』ワークショップを通して~ 青木 宏子(大阪教育大学), 高橋 暁生(積水ハウス株式会社), 加藤 可奈衛(大阪教育大学), 渡邊 美香(大阪教育大学)

《実行委員会企画》

教育学部 講義棟・本館・体育棟				
	講義棟 2階 5202 講義・演習室	本館 2階 219 理系共同実験室	体育棟 2階 ダンスレッスン室	講義棟 A会場 2階 5206
11:15 ※移動時間を含む 12:35	ふじえ みつる(愛知教育大学名誉教授) 講演「STEAM・教育・感性」 ディスカッション 登壇者:ふじえ みつる 清田 哲男(岡山大学)	岡山大学大学院教育学研究科附属国際創造性・STEAM教育開発センター(CRE-Lab.) 理科による「創造性・多様性チャレンジ」 授業体験ワークショップ 講師:稲田 佳彦(岡山大学教授)	岡山大学大学院教育学研究科附属国際創造性・STEAM教育開発センター(CRE-Lab.) 保健体育による「創造性・多様性チャレンジ」 授業体験ワークショップ 講師:酒向 治子(岡山大学教授)	ワークショップ 「面白くて高度な美術教育学研究論文は誰にも開かれている」 発表者:有田 洋子(島根大学), 菊地 虹(立教大学大学院), 金子 一夫(茨城大学名誉教授), 清家 颯(東京学芸大学)
12:35 - 13:30 昼休憩 ※弁当(注文のみ) 配達は11:00頃の予定				

【2日目】2025年3月23日(日)

午後 《研究発表Ⅲ》

教育学部 講義棟 / 9:00~受付					
	A会場	B会場	C会場	D会場	E会場
	2階 5206	2階 5208	3階 5304	3階 5305	3階 5301
① 13:30 14:00	美術の表現主題生成に影響する環境因子の研究 妹尾 佑介 (岡山県立玉島高等学校)	「スペキュラティブ・デザイン」の視点から見た「江差町日本遺産プロモーションフラグシップ制作」が有する「未来への思索」の可能性について 橋本 忠和 (園田学園女子大学)	知識や技能を働かせて生成する<概念>—小学校高学年を対象とした「造形遊び」の事例より— 村田 透 (滋賀大学)	「共同してつくりだす活動」を学習環境デザイン視点から見つめ直す—全校児童が体育館の床に絵を描く実践を通して— 久保田 美和 (敬愛大学)	戦前期中等用器画教育の質的検討序説—「文検図画科」を手がかりに— 亀澤 朋恵 (高田短期大学)
② 14:05 14:35	「創造性が社会と出会う美術教育」による教員の学びに関する一考察 松浦 藍 (岡山大学), 宣昌大 (大阪教育大学附属天王寺中学校), 木村 仁 (滋賀大学教育学部附属小学校), 武田 聡一郎 (岡山大学教育学部附属中学校), 妹尾 佑介 (岡山県立玉島高等学校) 清田 哲男 (岡山大学)	情動を媒体とした学習環境デザイン研究「つくりだす喜び」との関連 守屋 建 (東京学芸大学附属小金井小学校)	子どものための和紙づくりの技法に関する研究—木から紙へ, イチジク和紙づくりの提案— 笹原 浩仁 (福岡教育大学)	A/r/tography を用いた協同探求の試み—山形大学附属中学校美術部での実践をもとに— 廖 曦彤 (山形大学地域教育文化学部)	秋田県図画教育における地方画家「伊藤弥太」の「橋頭堡」—中通尋常高等小学校訓導山崎勝明の図画教育観と実践— 長瀬 達也 (秋田大学)
③ 14:40 15:10	中学校美術科の表現活動における「主体的に学習に取り組む態度」の可視化に関する一考察 清田 哲男 (岡山大学), 宣昌大 (大阪教育大学附属天王寺中学校), 木村 仁 (滋賀大学教育学部附属小学校), 武田 聡一郎 (岡山大学教育学部附属中学校), 妹尾 佑介 (岡山県立玉島高等学校), 松浦 藍 (岡山大学)	小学校高学年の描画活動での詩教材の有効性—児童の思考の過程と「主題」生成の関連から— 有川 貴子 (浜松市立中ノ町小学校)	「ヒロシマの空」平和教育を基にした題材の開発・実践について 友竹 晋太郎 (広島市立長束中学校)	美術教育における生成AIの活用に関する一考察 豊岡 大画 (群馬県総合教育センター), 西村 德行 (東京学芸大学), 則武 和輝 (コニカミノルタ株式会社)	戦前期の理科掛図画像の美的教育要素について 牧野 由理 (埼玉県立大学), 金子 一夫 (茨城大学)
④ 15:15 15:45		授業ポートフォリオを彩る「印象ドローイング」の可能性—教員養成における「芸術知」の育成— 高橋 文子 (東京未来大学)	保小大共同研究事業「平和の種を植えよう! Kids ゲルニカ プロジェクト」における分析と考察 丁子 かおる (和歌山大学教育学部)	大規模言語モデルを用いた対話的オートエスノグラフィーの可能性 黒木 健 (筑波大学大学院)	近代日本図画手工教科書データベースを活用した研究の展開—毛筆画時代の学習内容を中心に— 赤木 里香子 (岡山大学) 金子一夫 (茨城大学)

《研究部会》

教育学部 講義棟 ※16:30 受付終了					
	A会場	B会場	C会場	D会場	E会場
	2階 5206	2階 5208	3階 5304	3階 5305	3階 5301
15:55 17:25	インクルーシブ研究部会	授業研究部会	乳幼児造形研究部会	造形カリキュラム研究部会	美術教育史研究部会



理事退任にあたって；美術教育界に対話的關係の形成を

理事（事業部） 永守基樹（和歌山大学名誉教授）

Director: Operations Department, Motoki NAGAMORI, Professor emeritus of Wakayama University

■理事退任のご挨拶

今期・2024年度をもって、理事を退任させて頂くことになりました。30年余にわたる在任中、先輩諸氏に教えられ、同輩・後輩諸氏に支えられて参りました。この間、いくつかの役職も拝命しましたが、十分にご期待に添えなかったかと存じます。会員の皆さまに力不足をお詫びするとともに、各位より頂戴したお力添えに心より感謝申し上げます。向後も一会員として美術教育研究に携わりたいと願っております。皆さまからの変わらぬご指導をお願い致します。

■美術教育デフレ時代の効率化と集中化

退任に際して、近頃感じている本学会の課題を記しておきたいと思えます。課題を次世代に託すようですが、ご容赦ください。それは「美術教育界における対話的關係の形成」という課題です。

教職大学院の設置で顕在化した「教科教育の冬の時代」はしばらく続くようです。年間に百本以上提出されていた修士論文が生まれなくなり（研究の訓練を経た若手教員の供給が失われ）、教員養成系で教科教育担当教員の多くがポスト減（需要減）。需／給ともに低下と同様のデフレ的な現象は、教育の様々な局面で見られます。このデフレ・スパイラルは少子化を背景とし、そこからの脱出口は当面見出せそうにありません。

このデフレ現象への対応策としては、美術教育界の「効率化」と「集中化」がその教育の創造性を保持するための数少ないオプションのひとつだと思われます。問題は何を効率化し、何処に向かって集中化するのか……です。

■美術教育界を構成する四者のコミュニケーションを効率化し、カリキュラムに集中化すること

美術教育界は大雑把に「教育現場・行政・ジャーナリズム（含教科書出版）・アカデミズム」の四つの要素から成っています。この四者間の対話・情報交換を円滑化・活性化・深化することが「効率化」に連なります。この四者の対話的關係には「相互の独立・自律を尊重し、適切な距離を保った水平性」が求められることでしょう。

では「集中化」の向かう先は何でしょうか。集中を受け止める「場」が先が必要です。美術教育界の多様な対話が、そこで結びつき、せめぎあい、統合へと向かう「場」。私は「カリキュラム」が、そのような「場」になり得ると考えています。

■題材と教育現場の特権性を超えて

従来は「授業実践」や「題材」が対話の軸でした。教育という営為では、授業は特権的に重要です。その根拠は「子供」を背後に持つことです。同じ根拠で、先の四者中では「教育現場」が特権的でした。ということで、この「授業—題材」のコンビ、授業実践とその設計図＝題材が、美術教育界全体の対話の場であったわけです。美術教育界での対話の多くは「授業—題材」をめぐって交換され、背後に子供の姿を思い描きつつ語られます。子供との結びつきが言葉の正当性を保証するという構図です。

それに対し「カリキュラム」は対話の場となりませんでした。最大の理由は、日本の学習指導要領が持つ強い規制力です。教育界全体でカリキュラムの開発や批評の能力を培う体験が不足し、カリキュラムをめぐる対話は貧しいものでした。アカデミズムにおけるカリキュラム研究にしても、学習指導要領のくびきによって、それが成熟しないのは美術教育に限ったことではありません。

■美術教育界の地盤沈下のなかで戦後の諸システムが危機を迎える

さて、学習指導要領とそれに準拠した教科書が教育実践の枠組みをつくるとすれば、現場はカリキュラム創造から遠ざけられてきたようですが、実はそうでもありません。学習指導要領の作成や、教科書編集でのカリキュラム編成作業。それらは戦後の長きにわたって現場の力に大きく依存してきたのです。

教科調査官は数名の協力者とともに学習指導要領を作成してきましたが、作業の質・量に比して小さすぎるチームです。それが可能なのは、教育現場で先進的な実践を試み、知見を蓄積した優れた教師達の協力でしょう。教科書の編集も事情は同様です。優れた題材開発者は多くカリキュラム開発の資質を持っているようです。美術と教育の価値を深い場所で結びつける能力は、題材とカリキュラムの双方に通じるものでしょう。学習指導要領や教科書に協力している教師達は、題材例を提供すること以上の力を作業に与えていると想像します。

しかし優れた教師は孤立しては生まれません。彼（女）を育て支える人的ネットワークがその実践と教師力の母胎となります。各地の附属学校などもその母胎でしたが、多くで教科教育研究離れが進んでいます。平行して

地域全体の地盤が沈下し、多くの府県で美術教育系研究大会開催が危ぶまれるとか。若手の人材とそれを育てる母胎の双方を失うことは、様々なレベルでの戦後の美術教育界を支えてきたシステムの危機を意味しています。

■対話の軸を題材からカリキュラムへ転換する

教師達による「授業研究会」は教育現場の良き伝統とされます。「題材を構想し、指導案を書き、授業を行い、振り返る」という、一連のプロセスに教育現場は力を持ってきました。このプロセスで「題材」なるものは、教師と子供のコミュニケーションの媒介であると同時に、授業は題材のコンセプトが顕在化したかたちと捉えられます。また他方で、授業は（題材を経由して）カリキュラムに内在している「意図」が実現したかたちでもあるのです。私たちは習慣的に「題材—授業」の複合体として美術教育の営為を捉えがちですが、視点を移動させて「題材—カリキュラム」の複合体を軸に捉えることも可能です。この移動によって、授業はカリキュラムの意図や流れにまで視野を拡張して語られます。また、この移行は、美術教育なる営為から（一旦は）子供の身体を切り離し、授業という出来事と距離をつくり出すことをもたらします。教師は子供の身体と授業での出来事を「題材—カリキュラム」の場で再把握するために、様々な言語装置で語り直すことが求められます。「題材—授業」の枠組みで為される言語活動は限定されがちですが、「題材—カリキュラム」の枠組みでの批評的活動では、その枠組みが大きく開かれます。この開かれに、美術教育界の他の要素である行政・ジャーナリズム（教科書）・アカデミズムで交わされる言葉との交換が可能になり、美術教育界全体の対話が活性化することが期待されます。

授業研究での言葉が、題材からカリキュラム批評へと開かれることによって、教科書の学習指導要領解釈の是非を論じ、あるいは学習指導要領の示唆するカリキュラムの可能性を論じることにも連なってきます。学習指導要領や教科書の示すカリキュラムが実は柔軟で脆弱なものであることも見えてくるかも知れません。アカデミズムはカリキュラム批評の方法を提示するばかりでなく、学習指導要領と平行する多様なカリキュラムの可能性を呈示し、他の参照に供することも可能でしょう。そして、「題材—授業」と「題材—カリキュラム」の二者を往還することで、教育現場はカリキュラムの言葉に授業での子供の身体や出来事を組み入れること、つまり授業を支えている「私のカリキュラム」に対してオーナーシップを持つこと、さらには授業における「教え」のスタンスの自覚も可能になるのです。この変化は美術教育界の他の要素にも対話を通じて波及していくことでしょう。つまり、カリキュラムという場を共有することが、美術教育の諸要素のそれぞれの組織で生産される言説を交換可能なかたちにするということであり、この交換の活性化が美術教育界の創造性を喚起する…。これが文頭に書いた「美術教育界の効率化」ということです。

■カリキュラム論の困難を超えて

しかし、カリキュラム開発はハードルが高く、カリキュラムの批評や評価は比較的高度な能力を教師に求めます。地盤低下の美術教育界で、それは「絵に描いた餅」のようにも見えます。とは言え「カリキュラム・マネジメント」や「学習指導要領の柔軟化」にしても、それらの背後の「学習指導要領の事前規制型から事後評価型への転換」にしても、それらは美術教育界が対応すべき真つ当な課題ではありません。

冒頭に述べた教育のデフレと縮小には、教師ひとりひとりの能力を高め、様々なアカウンタビリティに応えられる人材を育てることで、教育に関する権力の分散を可能にする…。戦後の諸制度が失効しつつある時、向かうべき方向としては（実現の可能性はともかく）合理的なビジョンではあります。近年の教師の「働き方改革」や教員採用状況への行政の対応を見ていると、行政からの教育資源のバックアップなどは期待できそうにありません。当面の方略としては「対話による効率化とカリキュラムへの集中」しか無い、とも思えます

■本学会の課題

実のところ、本学会はカリキュラム研究の成果を十分に示せていません。ニーズが無かったにせよ、学習指導要領や教科書に関わる会員の存在を思えば、やはり対話～交換への意識の不足が要因かも知れません。カリキュラム開発の事例や経験はアカデミズムの場にも還元されて検討され共有されることが望まれます。

上のような「対話」の課題もさることながら、学会からの発信が課題です。おそらく以下の研究群が求められます。でなければ、対話において語るべきコンテンツを学会は持たないこととなります。

第一に、カリキュラム開発。例えば0歳から18歳に至る教育課程を行政は示していませんが、学会も同様。絵画・彫刻・デザイン・工芸の分野に関して、それぞれのカリキュラムの系統的な研究は僅少です。第二にカリキュラム批評と評価。日本のカリキュラムをモデルや事例としたものはほとんど無い。第三に学習指導要領や教科書への批評と評価。第四に各国のナショナル・カリキュラム等の資料収集と比較検討。等々……。

美術と学校と子供の三角形を統合する場がカリキュラムであり、私たちの存在が問われる場であろうと思います。当方は美術教育史部会によれば教員養成系大学院第一世代だとか。その役回りは「美術教育学の確立」でした。時代は移り「美術教育学の機能化」、つまり有用であることのアカウンタビリティが問われているようです。自由は学会の最重要価値ですが、広く対話を交わす場も必要であろうと考えています。

アウシュビッツ・テレジンから

理事（事業部） 水島尚喜（聖心女子大学）

Director: Operations Department, Naoki MIZUSHIMA, University of the Sacred Heart



個人史を語ることをお許しください。

大学教員になりたての30歳の頃、一人の美術教師の存在をジャーナリスト野村路子さんの著作を通して知り、私は衝撃を受けました。本のタイトルは、『絵画記録テレジン強制収容所』（ほるぷ出版、1991）。「アウシュビッツに消えた子どもたち」が副題でした。

このプラハ郊外にあったテレジン強制収容所は、第二次世界大戦下、当時アウシュビッツの予備収容所として機能しており、15000人の子どもたちがいましたが、次々に人生の最終地となるアウシュビッツへ移送され、生存者はわずか100人足らずだったといえます。

死が錯綜する極限の状況の下、子どもたちは一人の美術教師に見守られながら、テレジンの薄暗い屋根裏部屋で、絵を描き続けました。教師の名前は、ユダヤ人の画家フリードル・ディッカー・ブランデイス（Friedl Dicker-Brandeis, 1898～1944）。あのバウハウスでパウル・クレーやヨハネス・イッテムに学び、将来を嘱望された才能豊かな女性でした。彼女は、コルチャック先生同様にナチスからの逃亡の誘いを断り、収監前には子どもたちと収容所内で造形活動を行うために必要なクレヨンや染めたシートをスーツケースの中に詰め込みます。教育行為そのものが禁じられていたテレジン強制収容所の中で、子どもたちはディッカー先生の温かい眼差しに見守られ、以前の家族との団欒や楽しい思い出、遊び、おとぎ話など、一方では凄惨な場面も含め多彩なモチーフを描いています。これらのモチーフは子どもたちが他律的に描かされたものではなく、描かずにはいられなかった自身の思いや願いなどが生々と記されています。

テレジンで描かれた絵には、子どもの表現の根源的な意味が埋め込まれている～この事例をマイルストーンとして、私は子どもが描く行為の意味を考えるようになりました。そして、描くことは自らの感覚や想像力を駆使し、形や色、手触りなどによって、自己存在や生の意味を再確認することであり、生の喜びの体現であると思うようになりました。非人間的な過酷な現実を前にしながらも、未来への夢や願いを思い描くことは、単なる現実逃避ではなく、生きることそのもののアクチュアリティであり、生のリアリティでもある、とも考えます。

ヴィクトール・エミール・フランクル（Viktor Emil Frankl, 1905～1997）は、子どもたちの最終地となったアウシュビッツを生き抜き抜いたユダヤ人精神科医であり、『夜と霧』の著者として知られています。原著は『一心理学者の強制収容所体験』というタイトルであったように、強制収容所での極限状況における人間の有り様が克明に示されています。死が日常化する状況の中においても、未来への希望を持つこと、繊細な感性を持つことが、生存の大きな分岐点となっていることが示されています。過酷な労働の後に夕日を見て感動し、または妻の幻影が生きる希望へとつながる様子など、特に人間のイメージ機能の大切さが印象に残ります。人間の「生」、そして想像することの根源的な意味を問うた書であり、壮絶な描写とは裏腹に、希望への確かな道筋が示されています。一方、今日でも不条理を抱えながら生きていかざるを得ない状況が多くあります。社会の中に生きることをどのように見出していけば良いのか。後にフランクルは収容所体験を踏まえ、「生きる意味」を「創造価値」「体験価値」「態度価値」の三つの価値で捉え返し、ロゴセラピーとしてまとめました。その観点からも、自らの感覚や想像力を主体的に駆使し、生の喜びを体現する表現過程はこのうえもなく貴重であることを示しています。今日の教育状況を見直す基準の視点であると思います。

2023年9月のテレジンとアウシュビッツへの勤務大学主催のスタディーツアーは、参加学生さんはもちろんのこと、若い教師時代に感じた私自身の感性の「検証」の場ともなりました。訪問先では、ガス室に残された爪痕など、想像を絶する歴史的痕跡も直接目にしました。しかしながら、テレジンのサバイバーの方から、お父さんが工作で作ってくれた犬のおもちゃが心の支えとなったというお話などを直接伺ったりして、未来への希望を示す多くの事例にも出会いました。そのような体験が、自己変容をもたらし、それらが水紋のように広がっていることを実感しています。一人の人間の経験は、人類全体の経験の総体にも連なっているからです。

近年、「アファンタジア（Aphantasia）」という内的なイメージが持てない症例の世界的増加が伝えられていま

す。体験や目にした風景をイメージとして展開できない、それはコミュニケーションの基盤に関わる、または人間存在の根源に関わる問題とも捉えることができます。実感の伴わない記号的世界が、AI 環境の増殖と共に広がっているように感じます。今、記号とイメージとの豊かな往還が必要とされているのです。

(本文は、『平和と戦争を考える欧州スタディーツアー2023 報告書』(聖心女子大学現代教養学部教育学科 2023年11月発行)への水島寄稿文「8, むすびにかえて」に加筆修正したものです。)

『独学大全』（ダイヤモンド社・2020年初版）との対話

理事（研究部） 山木朝彦（鳴門教育大学名誉教授）

Director: Research Department, Asahiko YAMAKI, Professor emeritus of Naruto University of Education



多くの公立図書館で何ヶ月も先まで予約が連なり、累計で20万冊を大きく越える販売実績を有する、研究方法を論じた本がある。それが『独学大全 — 絶対に「学ぶこと」をあきらめたくない人のための55の技法』である。本文752頁（+索引34頁）という分厚い本で、長年、古今東西の知識というものが、何を追い、テーマ化し、どのような構成でできあがっているのか、黙々と追究し続け、その成果をブログで公開してきた「読書猿」（著者名）の力作である。

この本に書かれてある学び方を全て忠実に実行したならば、人文・社会系の研究のための基礎が培われることは確かなことのように思われる。そこで示された学術的情報の収集や整理と方法は、いわゆる基礎の基礎として、研究に関心がある者なら誰もが知っておくべき事だと思う。ただし、非常に手間暇が掛かり、綿密なスケジュール管理と禁欲的とも言えるノルマ的な実行力が求められ、私自身は実行できそうにない。

それでは少し、『独学大全』の内容を紹介しつつ、推薦された方法論を真正面から批評するのではなく、あたかも戯れるかのように思いのままコメントを加え、たまたま、そこに盛り込まれていなかった種類の探索及び探究メソッドについて、整理して伝えたいと思う。

◎研究のモチベーションについて

『独学大全』は研究意欲を強く長く維持するための動機付けについて多くの頁を割いている。研究時間が研究室と共に保証されている大学研究者や日々の学校教育／社会教育の実践そのものが研究の対象にもなり得る教師や学芸員とは異なり、学術研究とは全く異なる営業職や生産業などの職種に就いている者にとって、高いモチベーションを産み出し、維持するのは容易ではない。この問題に約3割の紙幅が充てられている。プロモーションの制度によって、教授や准教授などの上位階層への移動の際に必ず業績審査され、年度末近くになると年間の業績を提出し評価を受けなくてはならない大学研究者は、皮肉なたちで研究を産み出すために後ろから強い力で押されている。古いコンセプトをあえて使えば、外発的動機付けによる生産効率化が働くのである。もちろん、より前向きに研究成果を授業に反映させ、社会に還元することによって得られる喜びもあるのだが。

その点、『独学大全』は内発的な「研究することの喜び」をいかに自らに実感させるかについて焦点を当てる。そして、隙間時間に少しでも研究を進める方法を紹介している。

職業的研究者とこれから研究の道を歩もうとする者に共通する方法も紹介されている。例えば、「ポモドーロ・テクニック」である。これをやらないと会議資料の作成に追われる大学教員は、研究時間が確保できない。ゆえに、あらゆる種類の仕事を30分程度に単位化して、区切りを付けながら能率良く進める必要がある。また、「学習ルートマップ」は研究計画立案であり、これ無しに研究という研究は進まない。科研の応募書類のなかには、「学習ルートマップ」の精緻化を図り、形式美と技巧の粋を極めた美しき産物と化したものさえ存在する。

◎資料の探索のテクニックと「NDLオンライン」と「CiNii」について

インターネットによって収集可能な資料について、検索語の洗練を図る方法が示されている。しかし、最も重要なのは資料のアーカイブについてである。この点、『独学大全』は、研究職に就いていない研究志向のひとのために、利用可能な対象に絞り込んでいる。そのアーカイブ名が「国立国会図書館オンライン」[NDLオンライン/NDLサーチ]だと、すぐにわかる人は頻りに資料収集をしている人か、勘が鋭い人だ。私も大学附属図書館を利用できなくなってからは、本腰を入れて、このアーカイブを利用している。

ここからは私の考えなのだが、国会図書館の蔵書数は唯一無二であり、有用性が極めて高い。論文や書籍のデジタル化も徐々に進んでおり、最近もその恩恵にあずかった。リチャード・オールディントン著・新田潤訳『英雄の死』（1941初版）を読みたいと考えたが、稀少本と見え、神戸市立中央図書館1館のみの所蔵。ところが、この本は国会図書館のデジタル化済みの図書であり、自室のパソコン上のブラウザで全て読めたのである。

もちろん、教育書や美術関連の図書のデジタル化も進んでいる。各大学の研究紀要、各学会の論集についてもヌケなく収集され、一般市民の利用に供している。その点では、国立情報学研究所（The National Institute of Informatics (NII)）の図書・論集アーカイブであるCiNii (Citation Information by NII:NII 学術情報ナビゲータ) よりも使い勝手がよい。ご存知の通り、CiNiiでは探索対象となる論文が掲載されている該当雑誌の巻号

を調べ、大学附属図書館の収蔵実態をチェックし、図書館どうしの貸借実績に基づく依頼という手続きとなるが、これが意外に厄介である。しかも、短大、高専、専門専修学校に勤める研究者にとっても、名誉という冠付きとなってしまった教授にも、利用するにはハードルが高い。もちろん、国立大学の教員にとって、公費を充てることのできるこの仕組みの有用性及びその恩恵に勝るものはないが、デジタル化された資料へのアクセスのよさや遠隔地へのコピーの郵送（有料）という利便性に焦点を絞れば、「国立国会図書館オンライン」に軍配が上がるかもしれない。

◎「OPAC」と事典について

『独学大全』は、別のリソースとしてOPAC (Online Public Access Catalog) を挙げている。しかし、こちらは意図的か、技術上の問題なのか、全国の図書館間横断検索システムが提供されておらず、近隣の公立図書館などからの図書の借り出しに特化されたアーカイブとなっている。さらに、『独学大全』は知識のレイヤー（地層）を深掘りするツールとしての事典や辞書まで紹介する周到な構成となっており、傾聴に値する。ここではそこで取り上げられていないが、現代の諸学にとって基礎的な知を提供する事典を紹介しておきたい。

◎『スクリプナー思想史大事典』について

それは『スクリプナー思想史大事典』全10巻（丸善出版 2016）である。原典名は、“New Dictionary of the History of Ideas”である。直訳すれば「考えの歴史新百科」とでもいうべきものだ。もう少し、粋に訳したら、翻訳編集委員長の野家啓一（東北大学名誉教授 1949年生まれ）が言うように、「観念史新事典」となるだろう。ポスト構造主義以降の多種多様な現代思想と科学の知が要領よく纏められている。

私たち現代に生きる者すべての思考を形づくる基底に存在する「考え」を問い直すという、きわめて野心的な試みが結実した事典なのだ。この思想史大事典を読み進めれば分かるとおり、人類の思考の根幹部分も時代とともに大きく変化し、すこし前の「常識」は「常識」として通用せず、「非常識」に転落する。

そのことを理解できないままに、過去から続く常識を「不易」と勘違いするところから、「教育の不幸」という物語が始まる。この事典を耽読すれば、揺るぎない上意下達的システムに縛られ、啓蒙的教育活動を続けることが、どれほど致命的な停滞を日本社会にもたらすか、容易に理解できるはずである。カルチュラル・ダイバーシティ（文化的多様性）を前提とする現代社会に生きる全ての人間にとって、なにか美術教育研究に携わる者にとって、この事典は必読の書物と言ってよいだろう。力瘤が入りすぎたが、「シネマ」という項目を読むと、宮崎 駿、大友克洋、押井 守、士郎正宗らのアニメーションが大きく取り上げられ、彼らの作品が映画理論に与えた影響の重要性が述べられている。そういう現代文化に浸れる楽しい事典であることも附言しておきたい。

◎「OCLC」「EBSCO」「Springer」「ProQuest」「Google Scholar」について

本稿の終わりに、文献検索と入手の話に戻ろう。海外の文献検索について『独学大全』はOCLC(the Online Computer Library Center)とWorldCatの2件を挙げている。アクセスすれば分かるように、基本的に登録が必要なサイトであり、私は利用していない。

多くの国立大学と一部の私立大学は、EBSCOやSpringerという巨大電子図書販売および専門誌販売会社と機関として契約を結んでおり、大学に勤める多くの研究者がそのアーカイブを利用し、その恩恵に浴している。もうひとつ、ここで推しておきたいアーカイブとして、ProQuestがある。ながらく、UMI(University Microfilms International)として知られてきた全米の大学の学位論文の提供サイトの母体となる企業が変わったものである。以前は雄松堂(ある時期から丸善傘下)が日本の総代理店だったが、現在は、EBSCOやSpringerと同じく契約を結んだ大学に所属している研究者/学生が利用可能であり、学位論文の全てがオープンアクセスとなっている。

米国の学位論文の出来映えは玉石混淆ではあるが、非常に緻密に調査され、鋭い考察が展開されたものも数多くある。どうして、日本の美術教育研究者はそうした質の高い学位論文を参照しないのだろうか。筆者自身はぜひぶん有用な情報をそこから得てきたので、全く不思議だと感じている次第だ。(なお、部外者には書誌事項についてのみ、ProQuestのサイトで調査が可能である)。

上述の契約から外れている大学の教員は、『独学大全』の読者層と同じく、フリーで利用できる「Google Scholar」(グーグル スカラー)を利用する方法がある。そこから、運が良ければpdf化された学術論文や研究会資料に辿り着き、それらをダウンロードができる場合もある。

ProQuest等の情報は『独学大全』には掲載されていなかったが、英語論文の読み書きのテクニックは丁寧に紹介されている。そこには、「私は英語が苦手だ」と言い放ち、海外の動向や歴史に不案内であることの弁解とするような怠惰な研究者像は全く見当たらないし、想定もされていない。

研究に憧れ、その道を模索する人々の研究意欲を鼓舞し、形を与えようとする『独学大全』を読んでいると、なんだか鋭い刃を突きつけられている感覚に襲われる。その感覚に煽られたまま、自分が獲得したわずかな研究メソッドについて綴ったこの拙文を「美術科教育学会通信」という私達のアーカイブに残しておきたい。

題材開発と失敗の予測

理事（研究部） 西村德行（東京学芸大学）

Director: Research Department, Tokuyuki NISHIMURA, Tokyo Gakugei University



題材開発は創造的な活動であり、教師にとっての醍醐味でもある。目の前にいる児童・生徒とどのような授業を行うのか、その実態を踏まえ、培いたい力を内容や方法等の授業の要素で肉付けし、授業をつくり上げていく。教師からのメッセージを、まさに児童・生徒が体感できるようにつくり上げられたものが授業である。一方、授業づくりには様々な苦悩が付きまとう。明日の授業をどのようにするか、教科書や題材集を前に、日々悩みながら授業を準備する教師もいる。教科書や題材集は、みかたをかえれば、ある教師の「成功例」といえる。題材が不可分なく網羅的に配列され、それをなぞることで授業がうまくいくような気持ちにさせる。しかし他の人の成功事例を真似することが、自分の成功を約束しないのが授業である。よい題材であっても、それをただ真似するのではなく、創造的に授業をつくり上げていく力が教師には必要なのである。教師は授業をつくるときに、どのような思考を働かせているのだろうか。材料や場所、児童・生徒の実態から、児童・生徒が造形的な力を発揮している姿を想像し、授業をつくり上げていく。しかしながら同時に、児童・生徒がそれらの力を発揮できていない姿、いわゆる「失敗した状態」も予測しているのではないだろうか。それをできるからこそ、適切な手立てを事前に準備することが出来ると考える。

図画工作・美術科の授業で起こる失敗を、「事前」「導入」「展開」「まとめ」の時系列で考えてみる。「事前」で起こる失敗の特徴は、授業が始まる前に、すでに失敗することがわかっていることである。例えば実施する上で事前に伝えるべきことを忘れる「連絡不足」や、活動をするための材料・用具の準備、活動環境の整備等の「準備不足」がある。学習環境が整っていないければ、児童・生徒の活動そのものができないからである。また題材配列等の工夫がなく、児童・生徒のこれまでの経験値を調査や配慮なしに行われる「カリキュラムの意識不足」の授業では、活動が重複したり、十分な経験がないなかで活動せざるを得なかったりする状況が生まれる。その他、教師の「経験不足」から、児童・生徒の活動が想定できず、発達段階の無理解から、適時性のない活動を強いることで失敗が起こることもある。「導入」で起こる失敗の特徴は、「伝達不良」の一言につきる。準備までは順調でも、いざそれを手渡しする際に授業のめあてやその内容をうまく伝えなければ活動は始まらない。ここで重視すべきことは、児童・生徒が自分らしく「活動をイメージ化できるか」にある。情報が少なければ何をするかかわからず、逆に情報が多ければ児童・生徒の考える余白を奪ってしまうことになる。導入では他者意識を持ちながら、聞き手の気持ちになって活動の魅力を伝えることが求められる。「展開」で起こる失敗の特徴は、「想定不足」である。実施する授業でどのような展開が起こりえるのか、教師は児童・生徒の活動を予測しながら授業づくりを行う。しかしその想定を超えた事態が起こると、対応しきれず、結果として児童・生徒の表現の可能性を狭めることになってしまう。臨機応変に対応できるように経験値を積むことはもちろん、教師一人で解決しようとせずに、児童・生徒にも一緒に考えてもらう関係性を築くことも大切である。最後に「まとめ」で起こる失敗の特徴は、「目標の意識不足」である。授業は予定の時間がくれば終わりになる。しかしその終わり方次第で、これまでの学びも変わってくる。「まとめ」の時間は、授業を通して児童・生徒が様々な力を価値づけたり、共有したりする時間である。「まとめ」こそ、教師の資質・能力が一番試される場面といえる。様々な活動が展開された上で、「なぜこの授業を行ったのか？」を冷静に考える視点が必要である。

教師は題材開発する際、力を発揮する児童・生徒の姿を想像しながら授業をつくとともに、残念ながら力を発揮できない児童・生徒の姿をも想像しながら授業づくりをしている。児童・生徒が資質・能力を十分に発揮できる授業を行うためには、「こうすればまずくなる」という失敗も予測できることが大切である。しかし失敗を恐れるあまり教師の想定内で納まるような授業をすると躍動感のない授業になり、題材の面白さは半減する。ではどうすればよいのだろうか？

授業は「生もの」である。どれだけ想定し対策をしても、教師の想定をはるかに越える状況が起こる。寧ろ起こらなければ題材開発の醍醐味など味わえない。その時に教師がどのように振る舞えるか、その状況を児童・生徒とともに楽しめるかが創造的な題材開発には必要である。失敗が許されない不寛容の時代であっても、題材開発を教師が心から楽しめる教育現場であることを願っている。もちろん事前に予測できる失敗くらいは避けたいが。

書評 Book Review

監修・資料提供：宮脇 理，編集：佐藤 昌彦，表紙絵・章扉絵：川邊 耕一，発行：学術研究出版，2022年11月1日，ISBN978-4-910733-42-5

復刻集成 宮脇 理の世界 ミライへの造形教育思考 —アーキビストの目線で見る—

増田 金吾（高崎健康福祉大学 人間発達学部 特任教授 / 東京学芸大学 名誉教授）

本書の全体像

本書には宮脇理の教育思想，特に過去を語り未来へ向けた工作・工芸教育思想が集約されている。佐藤昌彦により捉えられた宮脇の業績集大成でもある。宮脇の奥深い文章表現を柱とし，著書・論文・作品発表・映像制作等の一覧を加えて宮脇発表のすべてを載せている。宮脇に影響を与えた人物，関わった人物の文章も載せ，手工・工作・工芸教育史が背景に位置づく。

本書の構成

本書を構成する章と節は次の通りであり，節等の主なポイントを紹介する。節には宮脇を中心とする肝となる復刻文が載せられ，出典先が丁寧に明記されている。紙幅の関係で各出典の表示は最小限に留めるが，出典のここでの明示は本書の性格上欠くことができない。章と章との間には「宮脇文庫」が散りばめられ，重要な資料提示の役を担っている。

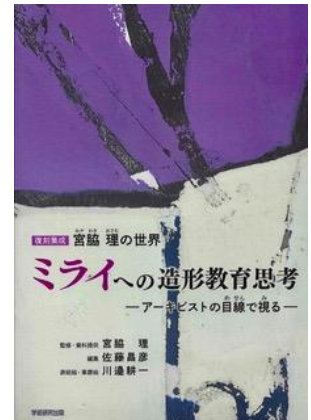
はじめに（佐藤）（以下章節タイトル後のカッコ内は執筆者）書名とも関係する「未来から現在を眺め，そこから未来を視る」（往還の論理）という意味を込め，「ミライ」をアーキビスト（科学・技術・芸術の連携が背景にあり，未来と過去の双方に眼を差し向けられる人。宮脇は長谷喜久一を最高のアーキビストと言う）の目線で視るといふ宮脇の視点に，佐藤は同調する。

第1章 宮脇理博士の歩み — thymos(気概)と mission(使命) — 冒頭，宮脇は教育の問題の焦点化には thymos と mission に眼差しを向ける必要があると言う。1. [復刻]宮脇理先生の歩み（佐藤）【出典】監修：宮脇，編者：佐藤，山本朝彦，伊藤文彦，直江俊雄『アートエデュケーション思考 — Dr. 宮脇理 88歳と併走する論考・エッセイ集 —』2016 2. [復刻]宮脇理略履歴（佐藤）【出典】『アートエデュケーション思考』

第2章 工作・工芸教育の源流 — 人間の責任と教育の規範 — 第2・3章では工作・工芸教育の歴史が述べられている。1. [復刻]スロイドシステムとロシア法—工作・工芸教育の源流—（宮脇）【出典】大橋皓也，宮脇『美術教育論ノート』1994 日本に影響を与えた工作・工芸教育の源流であるフォーク・アートのスロイドシステム，ロシア法（効率至上主義）についてふれている。2. [復刻]近代主義の出口で—工作・工芸教育のゆくえ—（宮脇）【出典】『美術教育論ノート』3. [復刻]歴史的視点から考える／リレー対談 教科構造を考える（宮脇，竹内博）ここでもスロイドシステムやロシア法がベースとなり語られている。【出典】『教育美術』1976年第37巻第1号 4. [復刻]責任の持てる教育媒体への接近（宮脇）【出典】宮脇『工藝による教育の研究—感性的教育媒体の可能性—』1993（宮脇の博士論文を著書としてまとめたもの）ここでも U. シグネウスの思想を支持し，教育の規範としてのフォーク・アートは，人間として責任の持てるモデルとして存在していたと述べる。5. [復刻]再起する工芸による教育（宮脇）【出典】『工藝による教育の研究』スロイドの意味と壊滅，スウェーデンにおける教育的スロイド，ロシア法について述べる。

第3章 工作・工芸教育百年，そして百年を超えて — 幾多の変遷と先人の貢献 — 1・2節は手工・工作・工芸教育史料である。1. [復刻]手工教育五十周年記念大会誌（解題 宮脇）【出典】工作・工芸教育百年の会『工作・工芸教育百周年記念誌』1986 『復刻 手工教育五十周年記念大会誌』は『工作・工芸教育百周年記念誌』に掲載されている。2. [復刻]工作・工芸教育百周年記念誌（企画・編集 宮脇）【出典】『工作・工芸教育百周年記念誌』工作・工芸教育推進者のことなどが載せられている。3. [復刻]手工教育の導入と実態（宮脇）【出典】監修：奥田真丈，編集委員：生江義男，伊藤信隆，佐藤照雄，瀬戸仁，宮脇『教科教育百年史』1985 スロイドシステムの重要性や衰退が述べられている。4. [復刻]中学校美術科誕生の過程（宮脇）【出典】『教科教育百年史』5. [復刻]文部省『中学校美術指導資料 第2集 工芸の指導』（学習指導要領における工芸指導の系譜）（宮脇）【出典】文部省『中学校美術指導資料 第2集 工芸の指導』1974 昭和33・44年の中学校学習指導要領改訂の要点，「美術（工芸）」と「技術・家庭」の相違点を明示している。6. [復刻]高山正喜久氏へのインタビュー（聞き手 宮脇，佐藤）【出典】佐藤『次世代ものづくり教育研究』2019 7. [復刻]工芸が指導要領にはいった趣旨（松原郁二）【出典】『造形ニュース』106号，1970

第4章 シカからの逆照射による“未来”思考 — M.エゲによる未来からのグランドデザインと現在から未来へ向けての計画 — 第4・5章には工作・工芸教育の未来へ向けての提言が述べられている。1. [復刻]教育への逆投影（宮脇）【出典】『工



藝による教育の研究』M. エンデの「今日私たちが持たねばならない尺度というのは、過去からではなく未来から、未来を見越してそこから今どう行動しなければならぬかの尺度を得る」という言葉を援用して教育を見ようとしている。この文章は本章3節にも登場する。2. [復刻]閃光させる「工芸による教育」(宮脇)【出典】『工芸による教育の研究』3. [復刻]短尺映像・電子書籍の共働により近未来の“美術・造形教育”を拓こう—逆引きによるコンテンツの精選から—(宮脇)【出典】『教育美術』No.840, 2012 M. エンデの発言, 電子書籍などの造形教育活用への参入(発展的未来)についてなどの記述である。

第5章 アーキストとしての眼差し — 過去・現在・未来を俯瞰すること,そして,科学・技術・芸術の連携 — 1. [年表]宮脇理博士の研究活動(原発事故後の11年間を中心に)(資料提供 山木, 作成 佐藤) 2. [復刻]なぜチャールズ・A・ベネット著作の抄訳を試みるのか(宮脇)【出典】著・抄訳:佐藤, 解説:宮脇『ものづくり教育再考—戦後(1945年以降)ものづくり教育の点描とチャールズ・A・ベネット著作の抄訳—』2018 美術科工芸と技術科加工の内容における「同床異夢」の経緯へ眼差しを向け,それを踏まえてものづくり教育の未来像を描くために『ものづくり教育再考』を書いたと佐藤は言う(インターネットの書籍案内参照)。3. [復刻]今後へのstepへどのようなapproachをすれば良いのか?(宮脇)【出典】『ものづくり教育再考』4. [復刻]解説者:宮脇理のLAST MONOLOGUE(宮脇)【出典】『ものづくり教育再考』 宮脇は『ものづくり教育再考』で「佐藤昌彦さんの『ものづくり教育の核には責任を伴う』の文言が必須の条件として思考の根底に据えられています」と言う。5. [復刻]100均の里・義烏(イーウ)への関心(宮脇)【出典】宮脇, 佐藤, 徐英杰, 若林矢寿子『中国100均の里・義烏と古都・洛陽を訪ねて』1994 日用品の卸売市場が多く立地し,世界的な日用品取引の中心地・義烏市を訪ねた。6. [復刻]これから・・・次は?・・・(宮脇)【出典】『中国100均の里・義烏と古都・洛陽を訪ねて』7. [復刻]ダ・ヴィンチ:“五千枚の手記”に視る「科学からアートへ・アートから科学へ」の構想世界(宮脇, 渡邊晃一, 佐藤)【出典】『第41回美術科教育学会 北海道大会 大会案内・研究発表概要集』2019 8. [復刻]Eメールトーク 第5回 映像メディアによる教育の再生という視座(永守基樹, 松原雅俊, 宮脇)【出典】『美育文化』vol.53 No.1, 2003

第6章 研究活動の記録と学会発表概要 1. [復刻]宮脇理の仕事(研究活動の記録)—平成5年3月31日現在—(宮脇)【出典】『宮脇理の仕事』(研究業績書, 筑波大学定年退官時に作成) 履歴, 著書論文等の一覧掲載。2. [年表]教科構造再構築のための史的研究(1)—手工・工作・工芸ならびに技術の教育—(宮脇)平成5・6年度科研 3. [年表]教科構造再構築のための史的研究(2)—松原郁二の立場による教育年表—(宮脇)平成5・6年度科研 4. [復刻]学会発表概要 2011年(82歳)—2020年(91歳) 美術科教育学会, 大学美術教育学会

おわりに (佐藤) 宮脇の第1章冒頭で示した教育の問題の焦点化に気概と使命に眼差しを向ける必要があるという言葉と, 指導者としての使命感と情熱は重なり, ものをつくることにかかわり何を大切に考えて子どもの前に立つべきかに本書が答えられる著作集となることを心から願う, として文章を括る。

感想とコメント

第1章では本書のスタートとして宮脇の履歴的全体像を示している。

第2章1節で「スロイドシステムとロシア法を欧米のように両者を対比かつ交錯させつつ, 我が国独自のものを作り出すことをしなかった, あるいはできなかったところにこれまでの工作, 工芸あるいはデザイン教育の混乱や低迷の原因の多くがあるように思われる」という宮脇の鋭い指摘には驚くと共に了解させられる。U. シグネウスはF. フレーベルの言う神からの恩物より無名の人々が作り出すスロイドの中に, トータルな教育の対象を見たのであり, それは人が人を教えるにふさわしい規範と方法を持っていると確信したのであろうと宮脇お述べる。こうした記述は本書の随所に見られるが, 神に委ねない人間としてのあり方, 教育の仕方は重要である。4節で, 教育の規範としてのフォーク・アートは, 人間として責任の持てるモデルとして存在していたと宮脇は捉えるが, この意味は重い。5節における, 手わたすものづくりの崩壊について, 社会的機構の近代化が, ものづくりを媒介として人間形成においてまでその質を変えたという宮脇の言葉は, よく理解できる。

第3章1・2節の手工・工作・工芸教育史料は, 宮脇の工作・工芸教育思想を把握する上でも欠かせない背景として位置づく。本章「宮脇文庫」の「IFFL 工作科教育」は, 復刻文として取り上げてもよかったのではないだろうか。

第4章1節での, M. エンデの「過去からではなく未来から, 未来を見越してそこから今どう行動しなければならぬかの尺度を得る」の言葉は意義深い。未来には柔軟性があるからである。3節での国立国会図書館長 長尾真の, 電子読書端末は音や映像も扱えるという発言を受け, 視覚の動的相対化の対象は造形教育においても大いに期待できるとの把握には, 早くから映像制作等を行ってきた宮脇の姿勢が背後にある。

第5章のタイトルはアーキストと工作・工芸教育との関連性を表している。本章全節はその意味内容を有し, 両者の関連が示されている。広義の工芸(品)の基本, その発信地・義烏はスロイドへの想いの具体的事例であり, 義烏でのものづくり教育の実態, それを踏まえて次世代ものづくり教育のあり方を探る。

第6章はタイトル通り「研究活動の記録と学会発表概要」である。

「はじめに」に佐藤が記した「未来から現在を眺め, そこから未来を視る」という意味を込め, 「ミライ」への造形教育思考をアーキストの目線で視ることの意義を明確に本書は伝えている, と捉えた。

こいずみ たかし

著者：小泉 卓，発行：幻冬舎，2024年7月31日発行，ISBN978-4-344-69067-7

なぜ、子どもはあのような絵を描くのか

増田 金吾（高崎健康福祉大学 人間発達学部 特任教授 / 東京学芸大学 名誉教授）

本書の全体像

魅力的なタイトルの本である。表紙や裏表紙の色刷りの子どもの絵がさらによい。子どもの絵を見ると楽しくなる、気持ちがおほぐれる、などと一度でも思ったことのある人ならば、子どもは「なぜ」そういう絵が描けるのだろうかと思ひ、その秘密を知りたくなるであろう。そんな問いに答えてくれるのが、この本である。本書は、子どもの描画の特徴を発達段階との関係で語り、先行研究者の論に著者の解釈を加え子どもの「あのような絵」を、なぜそう描くのか述べている。そして、3つのアプローチを著者の考えを踏まえて行い、最後に命題である「なぜ、子どもはあのような絵を描くのか」で締めくくっている。

本書の構成

はじめに 先行研究を踏まえた著者のオリジナルな見方を記述し、本書が、保護者、保育者、教師が子どもの絵を介した子どもとの楽しいコミュニケーションの契機になることを願っていると著者は述べる。

1. 子どもの描画の発達段階

絵を描き始める時期とその特徴 手の支えがなくても歩くことが可能な二本足歩行を始める1歳頃から、なぐり描きを始める。**絵を描くきっかけ** それは、周りの人が絵や文字をかいたりしているのを見ることがあるが、そうした機会がない場合は、親が紙や描画材料の扱い方を子どもに見せることもよしとする。**手による創造活動** 人間が生きる上で手の操作などが果たしてきた役割の重要性を W.G. ペンフィールドの「脳地図」における脳との関係で示す。また、なぐり描きや表現において、親や周囲の人からの温かい言葉（コミュニケーション）は、子ども自身の自己肯定感や創造性を高めてくれると言う。**なぐり描き（スクリブル）の段階（1歳～2歳半頃）** 子どもは、まずは手を動かす行為自体を楽しむ。最初のスクリブルは、いきあたりばったりであるが、子どもはスクリブルの結果がどうなるのかを楽しんでいる。肩、肘、手首、指の制御が効くようになると、同時に言葉の発達も進み、なぐり描きをしながらそれに「意味付け」を行うようになる。「意味付け」は、子どもが言語の意味（最初は視覚的意味）とその対象を一体のものとして認識する重要な知的活動であると述べる。**前図式期の段階（2歳半～4歳半頃）** 「図式」とは「物の関係を説明するために考案された図」で、「前図式」は図式期以前の形を意味する。前図式の始まりは、閉じた丸と、始点と終点が明確に描けている直線の出現であり、やがて頭足人が描かれる。子どもは描いたものにいろいろな意味を付与する。描画は保護者・保育者・教師と子どもとのコミュニケーションの重要なツールであると言う。**図式期の段階（5歳頃～9歳頃）** 「基底線」が描かれる。図式期になって初めて画面の上下を意識するようになるが、奥行きはまだ認識されず、重なりは表現できない。子どもの絵には、生活の中で体感する子どもの無意識の感情や思いが反映されている（レントゲン画など）。この時期には、垂直視と水平視の混交による表現があると言う。**静止画から絵物語へのアプローチ リアリズム（写実）期（9歳頃から12歳頃）** 重なり・前後・大小の変化で遠近を表現し始める時期である。視覚的意識が拡大し、画面内の地面の前後を意識する「平面」の発見によって、空は単なる「上」にあるものではなく、紙面全体（前後上下）にも広がっている存在となる。一点透視図法が可能になり始める（多視点から一視点へ）と述べる。

2. 先行研究

本章では、様々な立場の研究者を挙げて、「なぜ、子どもはあのような絵を描くのか」に対するそれぞれのアプローチの仕方について解説している。**G.H. リュケ(1876-1965)「内的モデル」「範例化」(子どもの絵の観察を軸にした哲学的アプローチ)** 大人の写実性は「視覚的写実性」、子どもの写実性は「知的写実性(知的リアリズム)」であり、そうした子どもの絵は、子どもの精神過程で視覚的印象として記憶にとどめている対象を無意識のうちに再構成して表現したものであると言う。リュケは、子どもらは対象をそのまま再現するのではなく、一人ひとりの子ども自身の「範例化」(イメージの代表)によって「内的モデル」を描いていると説明し、見たようにはなく知っているように描くのだと言う。**H. リード(1893-1968)「感情や感動をコミュニケーションするために創造した図式」(心理学・芸術論・教育論的アプローチ)** リードは、表現は「コミュニケーション」であると規定し、「表現は、本質的には『他者からの返答を求める提案』なのだ」と述べ、なぜ子どもはあのような絵を描くのか、という問いに対する答えを模索していると言う。**R. アルンハイム(1904-2007)「主知説批判」「分化の法**



則] (ゲシュタルト心理学を軸にした心理学的アプローチ) アルンハイムは、「なぜ、子どもがあのような絵を描くのか」の理由として、視的知覚の特性 (分化の法則)、媒体の特性、運動としての描画、をその根拠として挙げていると言う。J.J. ギブソン(1904-1979)「アフォーダンス」「絵画的不変項」(環境と身体との相互作用から) ギブソンは、幼児画も、「まっすぐ」「曲がっている」「始まりと終わり」「閉じる」など、環境からピックアップした「不変項 (特徴的な形)」を記録しようとした試みであると指摘している。また、「身体の移動」による視覚と環境との相互作用から、子どもは対象の「不変項」をピックアップし絵を描く、という解釈を提供したと述べる。セミール・ゼキ(1940-)「視覚脳」「視覚の恒常性」(神経生理学からのアプローチ) ゼキの現代美術の神経生理学的解剖の視座が、なぜ「子どもはあのような絵を描くのか」を解明しようとしている。そのためのポイントとして、網膜 (視野) 地図の曲面協調性、機能的特殊化、「視覚の恒常性」からの考察、を挙げていると言う。D.D. ホフマン(1955-)「視覚の構築性」(V.I. ビジュアルインテリジェンスからのアプローチ) R.L. ソルソ(1933-2005)「狭隘な中心視」(眼の機能からのアプローチ)

3. 3つのアプローチ

斜めの部屋 無意識の身体反応 (平衡感覚) としての水平・垂直感覚、と絵画の構図における水平性と垂直性との関係について、具体例を示しながら著者は述べている。**重力と平衡感覚 (地球と身体との相互作用から創造された平衡感覚からのアプローチ)** 子どもは「基底線」を描く5歳前後から無意識のうちに水平線と垂直線を捉え、紙の中の上下関係を認識するようになるが、この認識にとって必要な感覚が平衡感覚である。空間概念・平衡感覚・空間表現の感覚が統合され始めるのは4歳から6歳だとし、3者の形成時期は空間表現の発達段階とも重なり合っている。3者の感覚が統合されるのは5歳頃である。その統合のレベルが成人と同じレベルになる9歳頃から、「重なり」「前後」関係の表現を可能にするようになる。これらのことから、視覚、内耳の三半規管と耳石器、そして体性感覚野の相互作用の成長、と描画の空間表現の発達は、パラレルな関係性が成り立っていると言える、と述べる。**身体と外部の構築物 (建築・図書・スマホ等) と視覚脳との相互作用** 図式期の基底線に象徴される上下空間は、「身体の垂直・水平軸が対象に投影されるとともに、建築物等の構築物の水平・垂直の空間構造が自己の視覚脳に投影されることにより、相互の対象と身体への投影により描かれるようになる」と考えられると言う。

4. なぜ、子どもはあのような絵を描くのか

前述した研究者の言を「なぜ、子どもはあのような絵を描くのか」に対する答えとしてキーワードを中心に取り上げている。例えば、展開表現の机。これは絵画的不変更 (ギブソン) を示したものであり、リュケの「範例化」による「内的モデル」、ゼキの「視覚の恒常性」を簡潔にイメージしたものと重なると言う。つまり、「テーブルの長方形の天板と4つの脚は、机の形の範例であり、机の一般的な特徴であり、恒常的なものです」と著者はその意味を明確化する。加えて、この机の特徴は、知的リアリズム (リュケ) という概念として出てきたと述べる。

おわりに

2次元平面から3次元空間への表現への発達のためには、教育及び子ども自身の学習と制作が求められる。そして描画には感性のみならず知性も必要である。多様な絵画表現、ICT教育、他教科とのコラボレーションの重要性を述べ、美術科教育の望ましい姿を求めて本書を括っている。

感想とコメント

「1. 子どもの描画の発達段階」では、保育・児童学などからの発達論を基に、子どもが絵を描き始める時期からリアリズム (写実) 期 (9~12歳頃) までに焦点を当て語っている。この時期を本書の対象としている点は適当である。本題の「なぜ、子どもはあのような絵を描くのか」に答えるのに相応しい発達段階だからである。本章では、子どもの絵の魅力と各時期の特徴が明解に述べられている。全発達段階を見た時、図式期の絵がもっとも「なぜ、子どもはあのような絵を描くのか」の「あのような絵」に該当する特徴を持つ。そして、それが次の段階となるリアリズム (写実) 期・3次元空間への表現となり、大人の表現に近くなって行く。つまり、子どもならではの表現から大人の表現に変わって行くのである。

「2. 先行研究」について著者は、本書の命題に対する最適解はまだ構築されていないという。だからこそ、本書による提言が必要なのだ、と言いたいようだ。本章の記述は、美術教育学、心理学、神経生理学、教育論、芸術論など様々な立場の研究者からのアプローチを紹介している。ここでの各研究者の主張に対して著者は、「4. なぜ、子どもはあのような絵を描くのか」ということの意味する点を意識して、その解答につながることを押さえて論述している。例えば、本書の命題に答えるものとして、リュケの「知的リアリズム」の段階の子どもや「範例化」による論考は、「見たようではなく知っているように描く」レントゲン画などの表現の明解な説明となっている。

「3. 3つのアプローチ」については、「斜めの部屋」「重力と平衡感覚」「身体と外部の構築物と視覚脳との相互作用」を通じて述べている。ことに「3者 (空間概念・平衡感覚・空間表現) の感覚が統合される5歳頃には、上下の空間認識を示す『基底線』を描くようになります」という指摘は重要である。

「4. なぜ、子どもはあのような絵を描くのか」では、今までに述べた研究者の言を「なぜ、子どもはあのような絵を描くのか」に対する答えとして各研究者の特徴や研究者同士の類似点などをまとめている。これらの先行研究者を取り上げた著者に、広い視野と命題追究の姿勢を見た。

学会総会委任状の電子化と提出方法について

Notification Regarding the General Assembly

副代表理事 相田隆司（東京学芸大学）

2024年度の学会総会は、美術科教育学会岡山大会期間中の2025年3月22日（土）14:10～15:00に、岡山大学創立五十周年記念館にて対面形式で開催される予定です。つきましては、この総会へのご欠席が見込まれる方は必ず事前に委任状をご提出下さい。総会は、会則16条2に規定されているように、会員の5分の1以上の出席（委任状を含む）がないと成立しません。

今回の総会より委任状が電子化され、その受付は、すべて本部事務局支局のシステムを用いて行われます。以下に委任状の提出方法等をご説明いたします。この委任状の電子化とご提出につきましては、学会HP、一斉配信メールでもご案内いたします。なお、回答期間にご注意ください。

- 回答受付期間：2025年2月20日（木）10時00分～3月13日（木）17時00分まで（なお、賛助会員の方は、ログインされても案件が表示されません）。

<委任状の提出方法>

以下、手順■1～■3をご確認ください。

- 1 下のURLより、「調査管理・認証画面」にアクセスする。ご自身のIDとパスワードでログイン可能です。会員IDとパスワードをご入力後、「ログイン」をクリックしてください。

URL：<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/survey/AAE>

会員IDやパスワードが不明な方は上記にアクセス後、「ログインできない方はこちら」ボタンより、照会もしくは再発行を行ってください。

THE ASSOCIATION OF ART EDUCATION SINCE 1979
美術科教育学会

美術科教育学会 2024年度（学命年度開始月：1月）

調査管理 認証画面

会員IDとパスワードを入力して、ログインボタンをクリックしてください。

会員ID

パスワード

ログイン

ログインできない方はこちら

美術科教育学会 オンライン調査・アンケートシステム

本システムはオンラインにより調査や各種アンケートを行うものです。

【受付予定の調査・アンケート】

◆2024年度 美術科教育学会総会 委任状

★総会への欠席が見込まれる場合は必ずご回答をお願いします★

開催日時：2025年3月22日（土）13:30-14:10

開催場所：岡山大学 岡山大学創立五十周年記念館

（欠席者回答受付期間：2025年2月20日（木）10時00分～3月13日（木）17時00分まで）

※ なお、賛助会員の方は、ログインされても調査案件が表示されません

※ログインの際には、ご自身の会員ID（会員番号）とパスワードをご入力ください。

＜会員番号・パスワードをお忘れの場合＞

1) パスワードをお忘れで、会員登録メールアドレスがご利用になれる方
・本ページの右上の「ログインできない方はこちら」ボタンより、会員番号と会員原簿にご登録済みのメールアドレスによりパスワード再発行手続きをご利用ください。

2) 会員番号をお忘れの場合および会員登録メールアドレスがご利用にならない方
・本ページの右上の「ログインできない方はこちら」ボタンよりお進みいただき、パスワード再発行画面下部の「会員ID・パスワード再発行フォーム」のリンクから、問い合わせフォームへお進みください。
・問い合わせフォームでは、本人確認の必要上、フォーム上の必要情報を必ずご入力の上、情報を送信してください。

本システムについて、ご不明点がございましたら、下記の事務局へお問い合わせください。

美術科教育学会本部事務局支局
e-mail: g030aae-gallieo@ml.gakkai.ne.jp

注意) 個人情報の取扱について

株式会社カリレオは、個人情報を大切に保護することは当然の社会的責務であることを充分認識し、すべての役員および従業員が個人情報保護に関する法令およびJIS Q 15001に準拠して定める個人情報保護に関する当社の

- 2 ログイン後、「2024年度総会委任状」をクリックします。

美術科教育学会 2024年度 (学会年度開始月: 1月)

■ 調査回答登録画面 **回答待ちの調査・アンケート等に下記の画面より回答を送信して下さい。**

会員ID 000002 会員氏名 相田 隆司 会員資格 アクティブ

【調査検索】

検索条件 2024 年 12 月 21 日以降実施 回答済を含める

調査検索 ※登録受付中の調査を表示しました。回答を行う調査をクリックして下さい。

調査名 (下段: 調査主体)	開催期間 (下段: 調査概要)	オンライン登録期間
2024年度総会委任状 美術科教育学会	2024/11/11 - 2025/3/13 2024年度総会の議決権の委任を確認する	2024/11/11 15:00 - 2025/03/13 17:00

ログアウト

ログインしたら、「2024年度総会委任状」をクリック

- 3 「ご欠席」にチェックを入れ、代理人を選択します。代理人は代表理事を選択して下さい(その他[出席者]も選択できます)。連絡事項がありましたらご記入後、送信内容の確認、ログアウトと進みます。

■調査回答登録画面 回答待ちの調査・アンケート等に応じた画面より回答を送信して下さい。

会員ID 000002 会員氏名 相田 隆司 会員資格 アクティブ

【調査検索】

検索条件 2024 年 12 月 21 日以降実施 回答済を含める

調査検索

調査名（下段：調査主体）	開催期間（下段：調査概要）	オンライン登録期間
2024年度総会委任状 美術科教育学会	2024/11/11 - 2025/3/13 2024年度総会の議決権の委任を確認する	

【調査回答登録】

調査名： 2024年度総会委任状
調査主体： 美術科教育学会
調査概要： 2024年度総会の議決権の委任を確認する
調査責任者： 美術科教育学会本部事務局
調査期間： 2024/11/11 - 2025/3/13
完了メール送信先： t-aida@u-gakugei.ac.jp

「ご欠席」にチェック

代理人に代表理事を選択してください。その他を選択する場合は、代理人の氏名を記入ください。

美術科教育学会2024年度総会への欠席が見込まれます。

欠席にチェックをいれてください。（必須）

ご欠席

ご欠席の場合は必ず、議決権の委任をお願いいたします。
なお入力がない場合、代理人は代表理事とみなします。

代理人を選択してください（ご出席の場合は選択不要です）

（複数選択不可）

代表理事

代理人氏名（上記でその他を選択した場合にご入力ください）

本会へのご連絡事項がありましたら以下にご入力ください。

ご連絡事項

ご回答ありがとうございました。

画面下部の「送信内容の確認」ボタンをクリックの上、回答内容に漏れがないかご確認ください。

ログアウト

送信内容の確認

本部事務局より Notice from the Secretariat

■総会委任状の電子化と提出について

2024年度の総会は、委任状が電子化され、その受付は、すべて本部事務局支局のシステムを用いて行われます。本通信でもご案内いたしましたが、以下に委任状の提出方法等概要をご説明いたします。この委任状の電子化とご提出につきましては、学会HP、一斉配信メールでもご案内いたします。なお、回答期間にご注意ください。

●回答受付期間：2025年2月20日（木）10時00分～3月13日（木）17時00分まで（なお、賛助会員の方は、ログインされても案件が表示されません）。

<委任状の提出方法>

①下のURLより、「調査管理・認証画面」にアクセスする。ご自身のIDとパスワードでログイン可能です。会員IDとパスワードをご入力後、「ログイン」をクリックしてください。

URL：

<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/survey/AAE>

②ログイン後、「2024年度総会委任状」をクリックします。

③「ご欠席」にチェックを入れ、代理人を選択します。代理人は代表理事を選択して下さい（その他[出席者]も選択できます）。連絡事項がありましたらご記入後、送信内容の確認、ログアウトと進みます。

■会費納入をお願いします

3月の大会、リサーチフォーラム、学会誌刊行などの学会運営は、会員の皆様の会費により運営されています。ご自分の各年度の年会費納入状況については、以下の「会員情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。

<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE>

なお、納入状況に疑問がある場合には、下記の本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

留意事項

学会誌への投稿並びに大会での口頭発表に際しては、投稿や申込みの時点で以下の2つの条件を満たしている必要があります。

①会員登録をしていること

②当該年度までの年会費を全て納入済みであること。

* 会費を2年間滞納した場合は、会員資格を失います。

会費納入に関するお問い合わせ先：

(株)ガリレオ 東京オフィス 担当 和久津 君子

【窓口アドレス】 g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■会費振り込み口座名・番号

会員の皆様に送付される振込用紙、郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

・銀行名： ゆうちょ銀行

・口座記号番号： 00140-9-551193

・口座名称： 美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には、「2022 会計年度会費」等、会費の年度および会員ID番号を記入してください。また、ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は、下記内容を指定してください。

・店名(店番)： 〇一九(ゼロイチキョウ)店(019)

・預金種目： 当座 ・口座番号： 0551193

■住所・所属等変更、退会手続き

住所、所属先等に変更のあった方は、すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。退会を希望される場合は、電子メールではなく、必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にて、本部事務局支局宛にお送りください。あわせて、在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

美術科教育学会 本部事務局支局

〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401

(株)ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津 君子

【窓口アドレス】 g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■学会誌第46号に投稿され、掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様へ

学会誌第46号に投稿された会員で、掲載が許可された後、掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様にお知らせします。公費払いとは、大学研究費や科学研究費補助金などで支払うことをさしています。掲載負担金は、掲載ページ数が確定した時点（3月初旬を予定）で請求します。本部事務局支局からの請求書にしたがってお振込みください。ただし、各所属先が求める形式で請求書類を別途用意しなくてはならない場合は、そこから本部事務局支局と相談・交渉し始めたのでは、手続きが間にあわないことがあります。以下の留意点を読み、各所属先で前もってご確認いただき、相談・交渉するなど今から準備を始めて下さい。

<留意事項>

1. 原則として、必要な書類は、投稿者自身で作成いただき、書類等に捺印が必要な場合は、本部事務局支局までお送りください。作成いただく書類は、本部事務局支局からの「振込負担金請求書」以外の書類全てとなります。また、送付前に事前に以下までご連絡下さい。
2. 投稿者自身による「立替払い」を原則と致します。
3. 上記1、2を原則としますが、大学事務局と本部事務局支局が直接やり取りをしなければいけないケースがあります。この場合には、以下まで、手続きの概要、事務担当者の連絡先などをメールで知らせて下さい。

(以上)

美術科教育学会 本部事務局

The Japanese Association of Art Education's
Secretariat



- 〒305-8574 茨城県つくば市天王台1丁目1-1 筑波大学芸術系
直江俊雄（代表理事/教科教育学コンソーシアム理事）naoe@geijutsu.tsukuba.ac.jp
吉田奈穂子（本部事務局員/会員名簿）yoshida.nahoko.gn@u.tsukuba.ac.jp

- 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学
相田隆司（総務担当副代表理事/本部事務局長/庶務・会計・規約）t-aida@u-gakugei.ac.jp

- 〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2 群馬大学
郡司明子（本部事務局理事/会費管理）gunji@gunma-u.ac.jp

- 〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37 明治学院大学
手塚千尋（本部事務局理事/ウェブ）tetsuka@psy.meijigakuin.ac.jp

- 〒870-1192 大分県大分市大字旦野原700番地 大分大学
藤井康子（本部事務局理事/学会通信）fujii-yasuko@oita-u.ac.jp

- 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1丁目6-1 早稲田大学
大泉義一（研究担当副代表理事/学会誌編集委員長）oizumi@waseda.jp

- 〒187-8505 東京都小平市小川町1-736 武蔵野美術大学
三澤一実（事業担当副代表理事/リサーチフォーラム統括/8団体連携会議）kmis@musabi.ac.jp

- 美術科教育学会 本部事務局 支局
- （株）ガリレオ（<https://www.galileo.co.jp/>） 学会業務情報化センター
〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401
（担当者 和久津君子） TEL 03-5981-9824 FAX 03-5981-9852